

デカルト『省察』

山田弘明訳(ちくま学芸文庫 2006)

第一省察: 疑いをさしはさみうるものについて

- [1] すでに数年前に私はこう気づいていた．子供のころから私は、いかに多くの偽なるものを真なるものと認めてきたことか．そして、その後その上に築いてきたものが、どれもこれもいかに疑わしいものか．それゆえ、私がもし学問においていつか確固として持続するものをうち立てようと思うなら、一生に一度はすべてを根底から覆し、最初の基礎から始めなければならない、と．
- [3] 私がこれまでこの上なく真であると認めてきたものすべてを、私は、感覚から、あるいは感覚を通して受け取ったのである．しかし感覚が時として欺くことがあるのを私は知っていたので、われわれを一度たりとも欺いたことがあるものには、けっして全面的な信頼を寄せないのが賢明というものである．
- [4] たしかに感覚は時としてわれわれを欺くことがおそらくあるにせよ、感覚から汲まれるものであっても、まったく疑うことができないものが他にも多くある．たとえば、いま私がここにいること、暖炉のそばに座っていること、冬着を身につけていること、この紙を手で触れていることなどがそれである．
- [6] われわれの意識の家にあるものの像はすべて、それが真であるにせよ偽であるにせよ．真なる色から構成されているものと同じように、単純で普遍的なものから形成されていることを、必然的に認めなくてはならない．
- [7] こうした類に属すると思われるものは、物的本性一般およびその延長であり、さらには延長されたものの形、さらには量すなわちそれらの大きさと数、さらにはそれが存在する場所、およびそれが持続する時間、などである．
- [8] それゆえ、これらのことから、われわれはこう結論してもおそらく間違っていないだろう．自然学、天文学、その他の複合されたものの考察に依存する学問は、たしかに疑わしい．だが、算術、幾何学その他の極めて単純で一般的なものを扱い、しかもそれが自然においてあるかどうかには少しも関与しない学問は、何か確実に疑い得ないものを含んでいる、と．
- [12] 真理の源泉である最善の神ではなく、ある悪しき霊で、しかも最高の力と狡知を持った霊が、あらゆる努力を傾注して私を欺こうとしている、と想定してみよう．天、空気、地、色、形、音、その他外界のすべては夢のたましにほかならず、それによってこの霊は信じやすい私に罠をかけていると、私は考えよう．私自身を、手も目も、肉も、血も、いかなる感覚ももたず、これらすべてを誤ってもっているのだと考えよう．この省察に頑強に固執してとどまろう．かくして、何過信であるものを認識することが私の能力のうちにはないとしても、しかし、少なくとも偽なるものに同意しないことは私にできるのであり、この欺き手が、いかに力があるかと狡知があるかと、私に何も押しつけることができないよう、決然とした精神をもって用心するであろう．しかしこの企ては骨の折れるものであり、少しでも気を抜くと私はふだんの生の習慣に引き戻される．それはあたかも、たまたま眠りのなかで想像上の自由を楽しんでいた囚人が、その後自分は睡っているのではないかと疑いはじめるとき、呼び覚まされるのを恐れて、心地よい幻想とともにゆっくりと瞼を閉じるようなものである．そのように私は、古い意見に自分から逆戻りし、目覚めるのを恐れるのである．

第二省察：人間精神の本質について、精神は肉体よりもよりよく知られること

- [1] ほんのわずかでも疑いの余地のあるものはすべて、これを私がまったく偽なるものと確認した場合と同じように取り除こう。そして、ついには何か確実なものを知るまで、あるいは他に何もできないとするなら、少なくとも確実なものはないということ自体を確実に知るまで、さらに歩みを続けよう。アルキメデスは地球全体を損場所から動かすために、確固不動の一点しか求めなかった。私も、わずかでも何か確実で揺るぎないものを見出すなら、大きな希望を持ってよいであろう。
- [3] 私は身体と感覚にしっかりと結びついていて、それらなしでは在りえないほどではないのか？ だが私は、世界にはまったく何もなく、天も地も精神も物体もないと、自分に説得した。それゆえ私もまた存在しない、と説得したのではなかったか？ いや、そうではない。私が自分に何かを説得したのなら、たしかに私は存在したのである。しかし、何か最高に有能で狡猾な欺き手がいて、私を常に欺こうと工夫をこらしている。それでも、彼が私を欺くなら、疑いもなく私もまた存在するのである。できるかぎり私を欺くがよい。しかし、私が何ものであると考えている間は、かれは、私を何ものであるでもないようにすることは、けっしてできないだろう。それ湯瀬、すべてのことを十二分に考慮したあげく、最後にこう結論しなければならない！『私は在る、私は存在する』という命題は、私がそれを言い表すたびに、あるいは精神で把握するたびごとに必然的に真である、と。
- [6] (諸行為のうち) 考えることはどうか？ ここに私は発見する。思考がそれである、と。これの実は私から切り離されることができない。私は在る。私は存在する。これは確かである。ではどれだけの間か？ すなわち私が考える間である。というのも、もし私がすべての思考をやめるなら、その瞬間に私が在ることをまったく停止する、ということがおそらくありえるからである。
- [13] 私は、私の精神がいかに誤りやすいかには、驚かされるのである。というのも、これらのことを、たとえこれを私の精神のうちで黙って声を出さずに考察しても、やはり言葉そのものにとらわれ、たいていの場合、日常的な話し方そのものによって欺かれるのである。私は人間そのものを見ていると言っている。しかし私は帽子と衣服の他に何を見ているのか、その下には自動機械が隠されているかも知れないではないか。しかし私はそれが人間であると判断しているのである。このように私は、目で見ていると思っているものを、私の精神の家にある判断の能力によってのみ理解しているのである。
- [14] しかし一般の人よりも賢くありたいと願う人は、一般人の発明した話し方の形式によって懷疑を工夫することを恥じるであろう。

第三省察：神について、神は存在すること

- [2] もし、このように私が明晰判明に認識しているものが、偽であるということが、いつか起こりうるとするなら、その認識は事物の真理を私に確信させるには十分でないことになるだろう。それゆえいまや、私が明晰判明に認識するものはすべて真であるということ、一般的な規則として立てることができると思われる。
- [3] しかしながら、以前に私まったく確実で明らかであると認めたが、しかし後になって疑わしいと気づいたものが多々ある。それらはどういうものであったか？ すなわち、地、天、星、その他私が感覚によって獲得したすべてのものである。ではそれらについて私は何を明晰に認識していたのか？ すなわちそれらの観念そのもの、あるいは意識が私の精神に現れることで

ある。しかし、それらの観念が私のうちにあるということは、いまも私は否定しない。しかしそれとは別のあるもので、私が肯定しそれを信じる習慣から明晰に認識していると思っていたが、実は私はそれを本当は認識していなかったというものがあつた、すなわち、何らかのものが私の外にあり、そして観念はそれにまったく似ている、ということである。この点において、私は誤っていたが、少なくとも私の判断が真であつたとしても、それは私の認識の力からで生じたものではなかつたのである。

[4] 神の全能というこの先入の意見が私に生じるたびに、もし神がその気になれば、私が精神の目でこの上なく明証的に直感していると思うもにおいてさえも、私を誤らせることは神には容易であると認めざるをえない。しかし、私がきわめて明晰に認識すると思つていることがら自身に私を向けるたびに、私はそれによつてまったく説得され、自ずから次の言葉を発することになる。できるものならだれでも私を欺いてみよ、しかし私が何ものであると考へている間は、私を無であるとするはできなだらう。あるいは私が存在することはいまや真であるからには、私が存在しなかつたということ、いつか真にすることはできないだらう。あるいはまた、もしかして2に3を加えると5よりも多く、あるいは少なくするなど、要するに明らかな矛盾が認められることをなすことはできないだらう、と。確かに私は、何らかの神が欺瞞者であるとするいかなる機会もないし、何らかの神があるかどうかをまだ十分に知っていないので、あのような意見に依存しているだけの懷疑理由は薄弱であり、いわば形而上学的である。だが、こうした理由もまた取り除かれるためには、できるだけ早い機会に神があるかどうかを吟味しなければならない。というのも、このことが知られなければ、いかなる他のものについても、私はまったく確信することができないと思われるからである。

[6] 観念に関しては、それを他の何かに関係させずに、それ自身においてのみ見るなら、観念は本来、虚偽ではありえない。というのも、私がヤギを想像しようともキマイラを想像しようとも、私が一方を想像することは他方を想像することに劣らず、真であるからである。また意志そのもの。あるいは感情においても、虚偽を恐れることはない。…
それゆゑ、ただ判断のみが残り、ここに置いて私は誤らないように用心しなければならない。ところで判断において最もよくある主要な誤謬は、私のうちにある観念が、私の外にある何らかの事物と似ている、あるいは合致していると私が判断することに存する。というのも、確かにもし私が観念そのものを、私の何らかの意識の様態として考察するだけで、他の何らかの事物に関係させないならば、観念が誤謬の材料を私に与えることはほとんどありえないからである。

[7] ところでこれらの観念のうちで、あるものは生得的であり、あるものは外来的であり、またあるものは私自身によつて作られたものと思われる。というのは私は、ものとは何か、真理とは何か、思考とは何かを理解しているが、そのことをほかならぬ私の本性そのものから得ていると思われるからである。

[8] しかし、ここでとくに探求すべきことは、いわば私の外に存在する事物から私が得たと私がみなす観念について。私はどういう理由に動かされて、それらの観念がそれらの[外なる]事物に似ていると考へるようになったのかである。もちろん、私が自然によつてそのように教えられたからだと思われる。
たとえばいま私は、それを欲するにせよ欲しないにせよ熱を感じる。そこで、その感覚つまり熱の観念が、私とは異なる事物から、すなわちそのそばに私が座っている火の熱から、私にやってくると思うのである。他の何かよりもその事物が、その似姿を私のなかに送り込む、

と私が判断することほど手軽なものはない。

- [9] それらの理由が十分確固たるものかどうかを、これから見てゆこう。わたしがここで、自然によってそう教えられたと言うとき、その意味は、単にある自発的傾向によって私がそれを信じるようになったということであって、何らかの自然の光によって、それが真であることが私に示されたということではない。これらの二つは大きく相違している。
- [10] それらの観念が私の意志に依存しないとしても、だからといって、それらが私の外に置かれた事物から必ず出てくるということにはならない。というのは、いましがた述べたその傾向は、たとえ私のうちにあるとしても、私の意志とは異なるものと思われるが、それと同じように、私の能力のうちには、まだ私には十分知られていないが、その観念の作り手となる他の能力が、恐らくあるかもしれないからである。
- [12] これまで私は、私とは異なるある事物が存在し、それが私に感覚器官を通して、あるいは何であれ他の仕方によって、それ自身の観念あるいは像を私に送り込むと信じてきたが、それは確実な判断によるのではなく、ただある盲目的な衝動によるにすぎない。
- [13] しかし、その観念が私のうちにある事物のうちで、何らかの事物が私の外に存在するかどうかを探求するための、なおもう一つの道が私に浮かんでくる。すなわち、それらの観念が単に意識様態であるかぎり、それらの間にいかなる不平等も認められず、すべての観念は同じ仕方から私から出て来ると思われる。だが、ある観念がある事物を、他の観念方の事物を表現しているかぎり、それらの観念が相互に非常に異なっていることは明らかである。というのは疑いもないことだが、実体を私に示す観念は、単に様態あるいは偶有性のみを表現する観念よりも、一相大きな何かであり、岩場より多くの表象的実在性をそのうちに含んでいるからである。
- [14] 無からは何も生じないことだけでなく、より完全なものは、すなわち、その中により多くの実在性を含むものは、完全性がより少ないものからは生じ得ない...
- [16] もし私の持つ観念のうちで、あるものの表象的実在性がたいへん大きく、その実財政が形相的にも優越的にも私のうちになく、痛がって私がその観念の原因ではありえないことが確かであるほどならば、そこから必然的に帰結することは、一人私だけが世界に在るのではなく、その観念の原因となる何か他の事物もまた存在するということである。
- [18] 他の人間あるいは動物、あるいは天使を示す観念に関しては、たとえ世界には、私以外に人間も動物も天使もないとしても、それらの寛延が、私自身と物体的事物と神とについて私が持っている観念から複合されうることを私は容易に理解する。
- [19] しかし物体的事物の観念に関しては、私自身に由来したとは思えないほど大きなものは何もそのうちにはない。というのも、—中略—それらの観念において私が明晰判明に認識するのは、極めてわずかしかかないことに気づくだろうからである。すなわち大きさ、つまり長さ、幅と深さにおける延長、その延長の限定から生じる形、さまざまな形をもつものが互いに占有する場所、運動つまりその場所の変化、それに実体、持続、数を加えることができよう。しかしその他のもの、たとえば光と色、音、香り、味、熱と冷。その他の触覚的性質は、極めて不分明に不明瞭にしか私に認識されない。それゆえ、それらが真であるか偽であるか、言い換えれば、それらについて私が持っている観念が、ある事物の観念であるのか、そうでないのかさえ私には分からないのである。
- [21] 延長、場所、運動は、私が考えるものにほかならないので、私のうちに形相的には含まれない。しかし、それらは単にある実体の様態にすぎないが、私は実体であるので、私のうちに優越的に含まれることができると思われる。

- [22] かくして神の観念のみが残る．この観念のうちに，私自身に由来することができなかつた何かがあるかどうかを考察すべきである．神という名で私が意味しているのは，ある無限で，独立した、全知で、全能な実体であり、私自身を創造し、何か他のものが存在するならそのすべてを創造した実体である．これらすべては，私がより入念に注意すればするほど、私だけから出てきたとはますます思われなくなる．したがって以上のことからして，神は必然的に存在すると結論せねばならない．
- [24] 神の認識が私の認識よりも，ある意味で先行して私のうちにあることを，私は明らかに理解している．なぜなら，私が疑い、欲していること、つまり何か私に欠けており、私はまったく完全なものではないことを私は理解しているが、何らかのより完全な存在者の観念が私のうちにあつて．それとの比較によって私の欠陥を認めるのでなければ，いかにしてそう理解できるのであろうか？
- [36] 私が存在すること、そして最も完全な存在者、つまり神の、ある観念が私のうちにあること、このことだけから神もまた存在するということが最も明証的に証明される．
- [37] 残すところはただ，私とその観念をいかなる仕方で神から受け取ったかを吟味することだけである．すなわち，私はそれを感覚から汲みとつたのでもないし、感覚的な事物が，感覚の外部器官に現れる、あるいは現れるように見えるとき、感覚的事物の観念がふつうそうであるように、不意に私にやってきたのではない．また，それは私によって作られたものでもない．なぜなら，その観念からは何かを取り去ることも、それに何かをつけ加えることもできないことは明らかだからである．したがって残すところは、私自身の観念が私に生得的であるのと同じように，その観念は私に生得的であるということである．
- [38] 神が私を創造したとき、あたかも自分の作品に刻まれた製作者のしるしであるかのように、その観念を私に植えつけたということは，何ら驚くべきことではない．